２０２４年度

愛 知 の 音 楽 教 育

（第５９集）

目次

Ⅰ　はじめに 2
Ⅱ　教育課程編成にあたっての基本的な考え 2
Ⅲ　授業実践 3
「音楽を学ぶ楽しさに向かって」
―主体的・協働的な学びの中で、音楽表現を追求する学習活動を通して―
１　研究のねらい 3
２　研究の計画 4
３　研究の内容（実践１） 4
４　研究の内容（実践２） 6
５　研究のまとめ 9
Ⅳ　第７４次教育研究愛知県集会のまとめ 10

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会音楽部会

２０２４年度　教育課程研究委員

ブロック推せん　　◎部長○副部長

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
○田中　省吾	名古屋	鎌倉台中	吉田　将規	尾北	(犬山)南部中	◎梶野　琴絵	刈谷	かりがね小
○相羽　美里	名古屋	中根小	岡村　奈津美	知教連	味岡中	近藤　章博	蒲郡	(蒲郡)中部中

第７１次～７３次教育研究全国集会リポート提出者

７１次			７２次			７３次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
澤下　了輔	愛知	栄小	花井　朋美	西尾	一色中	相坂　晴美	名古屋	南陽小

第７４次教育研究全国集会リポート提出者　山内　純華（稲沢･法立小）

Ⅰ　はじめに

音楽は人の心を震わせる力をもっている。美しい音楽を聴いて感動する豊かな心を育み、音楽表現を通して仲間とかかわり合う喜びを味わわせることができる音楽教育には、多くの可能性がある。今一度、音楽教育の重要性と可能性を再認識し、目の前の子どもたちに向き合っていくことが大切だと考える。

さて、第74次教育研究愛知県集会にむけて22本のリポートが提出された。音楽の授業を通してどのような子どもを育てるのか、めざす子どもを育むために身につけさせるべき力とは何か、試行錯誤しながらすすめられたその実践報告では、子どもたちが心から音楽の楽しさを味わい、いきいきと活動しながら学びを深めていく授業実践が数多く報告された。

今回の授業実践として示すものは、昨年度、全国大会にて報告されたリポートであり、実践者が目の前の子どもたちに真摯に向き合った成果である。これらが、子どもたちのゆたかな学びにつながる一助となれば幸いである。

Ⅱ　教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養っていく。そこで、以下の点について重点的に指導していきたい。

①　歌唱・器楽の活動

歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏する。声の出し方を工夫し、各声部の役割や全体の響きを感じ取りながら合わせて歌ったり、演奏したりする。

②　音楽づくり・創作の活動

音そのものの響きやその組み合わせを試したり味わったりしながら、音遊びや即興表現をする。「音を音楽に構成する過程」を大切にしながら、思いや意図をもって音楽をつくる。

③　鑑賞の活動

音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、曲想やその変化などの特徴、楽曲の構造を理解して聴く。楽曲の特徴や演奏のよさを理解できるようにする。

④　共通事項について

音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る。音符、休符、記号などは、音楽活動を通して理解する。

○「生きてはたらく力」「ゆたかな学び」

一人ひとりが自分自身の力で音楽を楽しめる力は音楽的な「自立」とも言え、「この世にあふれる音楽を、自分の力で存分に味わえる」力は、子どもたちの人生をとても豊かなものにしていく。また、音楽づくりなど、音楽を通したコミュニケーションや人間関係・たくさんの試行錯誤やその中での発見を通して、子どもたちは人間的にも逞しく成長していくはずである。合唱、合奏、音楽づくりなどの一人では成し遂げられない音楽をつくり上げる活動を通して生きてはたらく力を伸ばしていきたい。

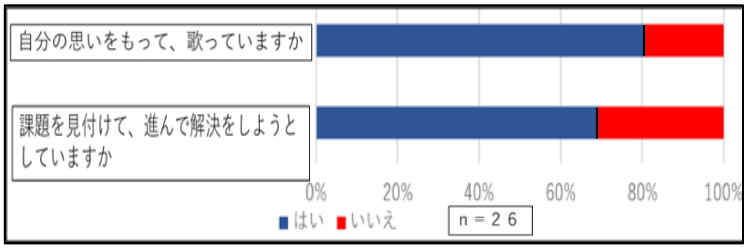
Ⅲ　授業実践

「音楽を学ぶ楽しさに向かって」
―主体的・協働的な学びの中で、音楽表現を追求する学習活動を通して―
名古屋市立南陽小学校　相坂　晴美

1　研究のねらい

わたくしは、曲想を聴き取ったり、「こんな風に表現したい」と思い試行錯誤しながら音楽表現を追求していったりするところに「音楽を学ぶ楽しさ」があると思う。そのために、曲想を感じ取り、そこからどう表現したいか思いをもつこと、思いを表現にいかすために自分の課題を見つけ、身につけた技能や知識を活用し、主体的・協働的に解決していく活動が必要であると考える。

本学級の児童は、いつも元気である。また、言われたことを素直に取り入れようとする素直さも、もち合わせている。しかし、この元気さは、音楽の授業では悪く出てしまい、どのような曲に対してもただ大きな声で叫びながら歌うにとどまっていた。楽しくなると、振りも付けてふざけて歌いはじめる。教員が注意をすると素直に止めるが、時間がたつと元に戻ってしまう。これは、これまで教員主導で授業をすすめ、自分の課題や思いに気付く体験が少なかったのではないかと考えた。まず、児童が歌唱に対してどのように考えているのかアンケートを行い、児童観察をした。「自分の思いをもって、歌っていますか」「課題を見つけて、すすんで解決をしようとしていますか」の両方の問いに 65%の児童が、「はい」と回答した。結果だけを見ると、自分の思いを実現するために課題をもって取り組み、さらには、その課題を実現することができると考える児童が多いことが分かった。しかし、『小さな世界』を歌う際、「どのような感じがするか」という教員の問い掛けに「どんな感じがするだろう」「なんて言ってよいのかわからない」と、戸惑いながら答える状況であった。自分の思いをもつ前に、曲想を捉え、言葉で表すところでつまずいていることが明らかになった。そこで、教員主導ですすめるのではなく児童が主体的・協働的な学びの中で音楽表現を追求する活動を通して、「音楽を学ぶ楽しさ」に気付くことができるようなてだてを取り入れ、実践をすすめていくことにした。

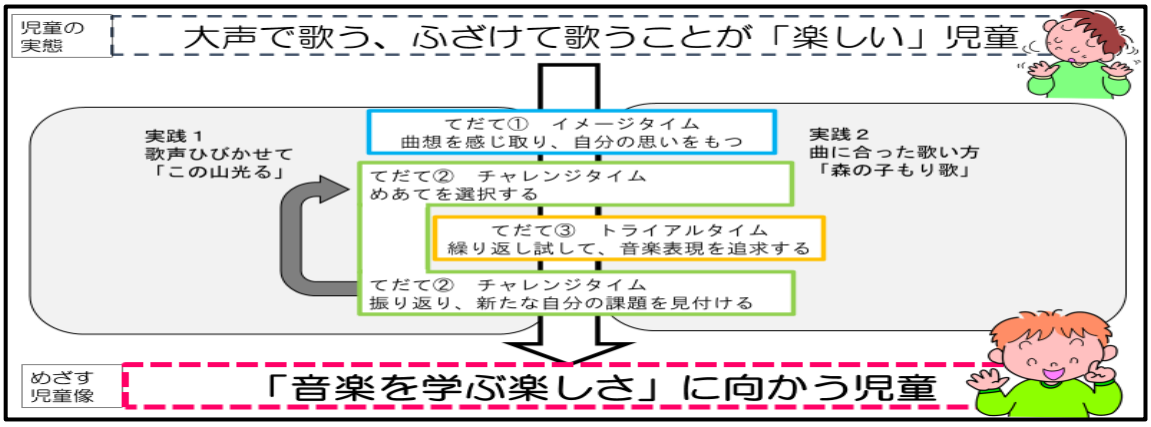


【歌唱に関するアンケート（実践前）】

2　研究の計画

(1) 研究の対象　　南陽小学校３年１組　２６人

(2) 実践とてだて



【実践の計画】

3　研究の内容（実践１）

実践１　歌声ひびかせて「この山光る」

(1) ねらい

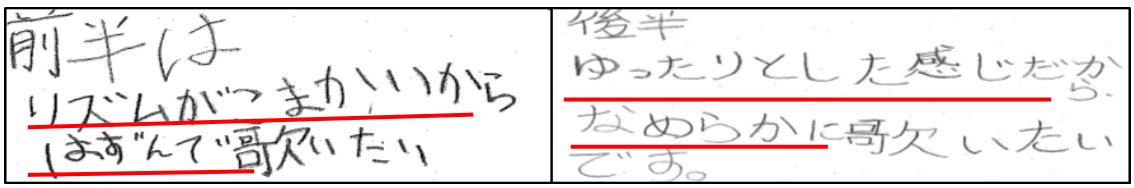
「この山光る」は、前半と後半の曲想が違う。この曲想の違いは、旋律だけでなく、リズムからも感じ取ることができる。また、「ホラヒ　ホラホ」などの部分から山のこだまを想像することができ、歌詞からも思いをもちやすい。このような曲の特徴を生かして、音楽の構造や歌詞の内容から自分の思いや意図に合った表現を追求することができるようにする。

(2) 実践の経過

てだて①「イメージタイム」曲想を感じ取り、自分の思いをもつ

「この山光る」の前半と後半の曲想の違いを捉えやすくするため、リズム打ちを行った。前半は細かいリズムのため、音符の数が多いが、後半は緩やかなリズムのため、音符の数が減る。速度は変化しない曲だが「前半は速いけれど、後半は遅くなった」とつぶやく児童がいた。教員が「本当に速さが変わったのか、２拍子の拍をたたいて確認しよう」と提案し、確認させた。すると、「速さは一緒みたい…」と児童が困惑した。ある一人の児童が１小節にある音符の数が違うことに気付いた。その後他の児童も「前半の方が、音符が多い」「後半は音符が少ない」と発言し、数を確認していた。

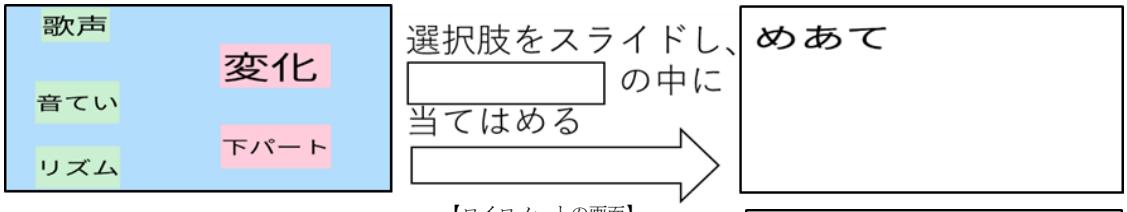
その後、もう一度リズム打ちをしながら曲を聴かせた。活動がすすむにつれ「前半は、弾んでいる」「後半は、滑らか」という発言が見られはじめた。さらに、「前半はリズムが細かいから、弾んで歌いたい」「後半はゆったりとした感じだから、滑らかに歌いたい」と、曲想を感じ取り、自分の思いをもつことができた。



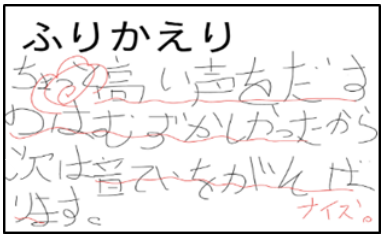
【児童の記述】

てだて②「チャレンジタイム」めあてを選択する・振り返り、新たな自分の課題を見付ける

自分の思いを表現に生かすことができるよう、児童がめあてをもって、練習に取り組めるようにした。ロイロノートを使用し、めあてを５つの中から１つ選択させ、スライドをして、カードに入れさせた。



【ロイロノートの画面】

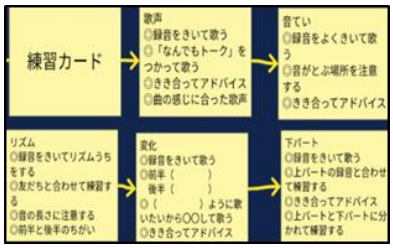


【児童の振り返り】

児童は、歌が上手になるには何が必要か熟考しながら、めあてを選んでいた。めあてを立てた後は、「トライアルタイム」に移った。（後述）「トライアルタイム」を振り返り、ロイロノートに提出させた。提出されたカードには教員が朱を入れ、児童の自己評価を認め、さらに自分に合った課題に向き合うことができるようにした。めあてと振り返りを循環させることで、音楽表現をどんどん追求できるようにした。

てだて③「トライアルタイム」繰り返し試して、音楽表現を追求する

てだて②「チャレンジタイム」で立てた自分のめあてを達成することができるように、繰り返し試して練習に取り組ませた。練習をすすめる時は、同じめあての友だちとグループを作り、歌い手と聞き手に分かれ、一緒に練習してもよいと伝えた。児童だけで練習をすすめられるよう、教員が録音した伴奏と、練習カードを用意した。

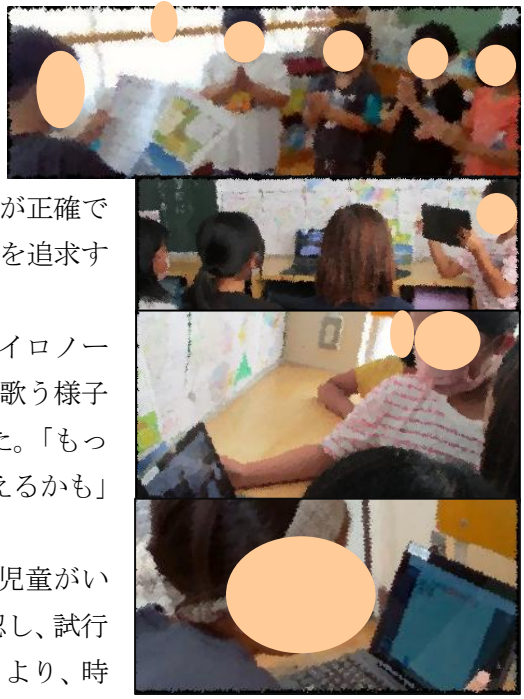


【練習カード】

リズムをめあてに立てたグループは、一人が聴く役、他がリズムを打つ役に分かれ、練習をしていた。「今、ここでリズムがずれたよ」「ここから、もう一度合わせよう」と、話し合いながら練習していた。活動をする中で、音符の長さが正確ではないことが明確になり、課題解決にむけ、表現を追求する姿が見られた。

曲想の変化をめあてに立てたグループは、ロイロノートの動画を活用し、練習をすすめていた。まず、歌う様子を録画し、その動画を見ながら話合いをしていた。「もっと弾んで歌おう」「声をつなげると、滑らかに歌えるかも」と確認し、思いを表現できるように試していた。

グループに加わらず、一人で練習をすすめる児童がいた。自分の表現をロイロノートで録音しては確認し、試行錯誤を繰り返していた。児童は「複数で練習するより、時間いっぱい考えられる」と考えたようだ。一人で音楽表現



【それぞれが練習をする様子】

を追求することは、どこかで限界がくるのではないかと心配したが、児童は、次時には音程をめあてに選び、同じめあてのグループと練習していた。児童は、自分の課題を一人で解決する時間と、グループで解決する時間を分けて取り組むことができていた。

(3) 成果と課題

てだて①「イメージタイム」

○　リズム打ちをしながら曲を聴くことで、曲想を感じ取り、音楽表現への思いをもつことができた。

●　児童がイメージタイムで導き出した「滑らかに」という音楽の言を、他の曲では、いかすことができなかった。

てだて②「チャレンジタイム」

○　自分の課題が何か、一人ひとりが真剣に考えることができた。また、振り返りの際、次時への課題を書かせて教員が朱でコメントを入れることで、めあてと振り返りを循環させ、主体的に音楽表現をすることができた。

●　めあてをすべて選択肢にしたことで、自由度がなくなってしまった。また、音程が取れていないのに難しいめあてを選んだり、十分できているめあてを選び続けたりする様子から、児童は自分に合った課題が理解できていないのではないかと考えた。

てだて③「トライアルタイム」

○　同じめあての友だちとのグループ、自分一人でなど、練習をすすめる形態を児童自身が選び、取り組むことができた。また、協働して活動を行ったり、動画を確認して自分のめあてと向き合ったりする中で課題が明確になり、課題解決にむけて熱心に取り組む様子が見られた。

●　教員の思うように学習がすすんでいないと、「この『練習カード』を見ればよいのではないか」「リズムがそろっているか」などと、指示を出しすぎ、課題解決にむけてリードしてしまった。

(4) 実践２にむけて

てだて①「イメージタイム」では、曲から感受したイメージを音楽の言葉とつなげるために、「音楽の言葉ノート」に取り組ませる。「音楽の言葉ノート」では、さまざまな曲を聴き、そこからイメージする雰囲気を全身で表現したものを録画し、音楽の言葉とつなげてロイロノートにどんどん記録していく。

てだて②「チャレンジタイム」では、めあての選択肢に白紙のカードを用意する。また、授業の終わりに自分の歌声を録音し、それを聴きながら振り返りをする。実践１同様、児童がロイロノートに提出した振り返りに教員が朱を入れる。

てだて③「トライアルタイム」では、引き続き、教員が録音したものと、練習カードを用意する。加えて、児童が練習中に迷うことがないよう、て本となる動画を新たに用意する。また、児童の様子をよく観察し、どの場面で助言・指導すると効果的で児童が主体的に学べるかを考え、児童を信じて見守るという気持ちをもつ。

4　研究の内容（実践２）

実践２　曲に合った歌い方「森の子もり歌」

(1) ねらい

「ピラロルラ」という児童の興味をひく歌詞から始まり、１番は親鳥、２番はひな鳥につ

いて歌う。これらの歌詞の情景を想像しながら歌うことができる。また、曲想や音型からどのように歌いたいか、自分の思いをもち歌うことができる。

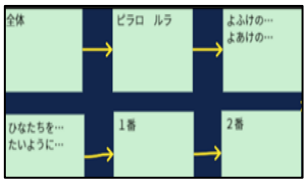
(2) 実践の経過

てだて① 「イメージタイム」曲想を感じ取り、自分の思いをもつ

曲想を捉えるため、「音楽の言葉ノート」を作成した。新しい曲を学ぶたび、曲想を全身で表現し、録画させた。それを、教科書の巻末にある「音楽を表すいろいろな言葉」を参考にして言葉とつなげ、「音楽の言葉ノート」にまとめた。さらに、言葉とイメージがつながるよう、明るい感じは㊥、暗い感じは㊤、どちらにも当てはまる感じは㊦と、色分けをした。児童は、「音楽の言葉ノート」に言葉が増えることを喜んでいた。

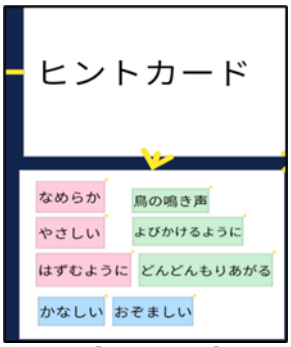
【身体表現を録画する様子】

「森の子もり歌」の学習が始まった。曲を数回聴くと「滑らかな感じがする」と児童が話した。それに続き「優しい感じ」「ピラロルラって何」と、曲から感じたことを話し合っていた。身体表現をする前に、これまでの経験から曲想を素早く感じ取り、話し合う姿から成長が感じられた。



【歌詞の枠】

ロイロノートに、歌詞を書いた枠を用意し部分ごとにどう歌いたいか自分の思いを書き留めるカードを用意した。自分の思いを言葉とつなげることが困難な児童には、選択肢を用意した。



【ヒントカード】

学習が始まると、ある児童が「ピラロルラ」の歌詞が「鳥の鳴き声だ」と気が付いた。教員が「何羽で鳴いているの」と問い掛けた。児童は「何羽で鳴いているんだろう…」と近くの友だちに相談をしはじめた。児童が「ピラロ」と「ルラ」の間に四部休符があると気付き、「２羽かも…」と考えはじめた。他の児童がやって来て「２羽だったら、話しているように歌ってみよう」と助言していた。教員が投げ掛けた問いから、児童が集まり、自然と話し合って学びを深める姿が見られた。

てだて②「チャレンジタイム」めあてを選択する・振り返り、新たな自分の課題を見付ける

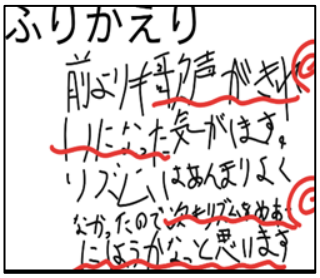
実践１同様、自分のめあての選択は、児童に任せた。今回は、白紙のカードを選択肢に入れた。また、振り返る時は、タブレットにある自分の声の録音を聴き、次時のめあてを考えさせた。

【一緒に練習する友達を探す様子】

児童は、よく考えてめあてを立てていた。練習をするとき、一緒に練習する友だちを探しやすくするため、めあてをロイロノートの提出箱に提出させ、画面共有をした。児童は共有画面を見て「歌声を練習する人、一緒にやろう！」「リズムの人！」と声を掛け合い、練習をはじめていた。

【録音した自分の声を聴く様子】

トライアルタイム後、タブレットに自分の歌声を録音して聴いた。リズムをめあてに選んでいた児童が「リズムはできたけれど、声が出ていない」と振り返っていた。また、音程が取れていない児童へは、「オルガンと自分の声が合っているかよく聞いてごらん」と問い掛けた。すると「ぴたっとは合っていない」と振り返ることができていた。録音や教員の問い掛けは、客観的に振り返る材料となった。



【児童の振り返り】

児童が提出した振り返りに朱を入れ、返却した。「歌声がよくなったから、次はリズムをめあてにしよう」と、課題を克服したことに加え、次時の課題も見付けられた。実践１より、自分の課題に合っためあてを立てられるようになったが、白紙のカードは、誰も使用しなかった。自分でめあてを考えてもよいと伝えたが、全員、選択肢を頼りにしているようであった。

てだて③「トライアルタイム」繰り返し試して、音楽表現を追求する

【て本を聴いて、教科書に書き込む様子】

児童が練習時参考にできるよう、伴奏の録音、練習カードに加えて、手本となるユーチューブの動画を用意した。手本は、教員用タブレットで見せた。

練習が始まると、各々が練習形態を選び、練習に取り組んでいた。て本を聴いていた児童が立ち上がり、教科書を持って来て、曲を聴いて学んだことを書き込みはじめた。

【全身の表現を用いて、練習する様子】

歌い方をめあてに選んだ児童が、二人並んで体を動かしていた。楽譜の５段目から６段目にかかる曲の盛り上がり方のイメージを全身表現で表しながら歌い試していた。「『ねんね静かにおやすみと』が一番強くなるから、これぐらいの強さかな」「優しい感じも出したい」と、歌いながら音楽表現を追求していた。手だて①「イメージタイム」で行った全身の表現を、自分で考えて練習にも取り入れることができていた。実際に、曲の盛り上がりや優しい感じが上手に表現されていた。この二人の児童が「みんなに盛りあがるところを知らせたい」と、全員の前に立ち、「『ねんね静かにおやすみと』の段々盛りあがる

【クラスに呼び掛け、練習する様子】

ところが合うように練習しよう」と呼び掛け、練習をすすめていた。この頃になると「はじめは４人で練習をしていたけれど、４人だと音がうまく聞き取れないから、二人ずつに分かれて練習をしている」と、自分たちでただ集まって練習をするのではなく、目的をもって児童どうしがグループを作り、よりよい方法を見付けようとしていた。今この時、一緒に練習をすることで成長できるからと声を掛け合い学ぼうとする姿から、主体的･協働的に学ぶ態度が身に付いてきたと考える。

【二人で練習し、教科書で確認する様子】

(3) 成果と課題

てだて①「イメージタイム」

○　曲から感受したことを、全身の表現を用いて「音楽の言葉ノート」にまとめたことで、曲想と言葉が結び付いてきた。また、曲を聴く度に自分の言葉で伝えられるようになってきた。

てだて②「チャレンジタイム」

○　自分の歌声を録音して聴いたり、振り返りに教員が朱を入れたりしたことで、客観的に自分の課題を見つめ、自分に合っためあてを立てられるようになってきた。

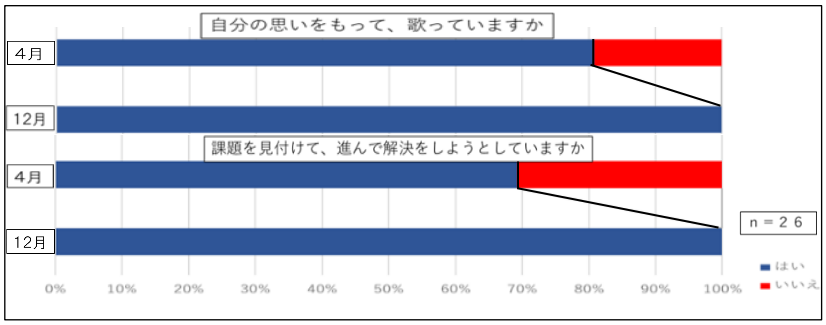
●　自分で柔軟にめあてを考えるのではなく、選択肢に頼る場面が見受けられた。

てだて③「トライアルタイム」

○　教員の録画や練習カードに加えて、て本となるユーチューブの動画を新たに用意したことにより、児童が自分たちの力で課題解決に取り組もうとする姿が見られた。また、教員が効果的な助言や指導を心掛けて授業をすすめたことにより、児童がそれをヒントに、主体的・協働的に音楽表現を追求する様子が見られた。

5　研究のまとめ

「自分の思いをもって、歌っていますか」、「課題を見付けて、すすんで解決をしようとしていますか」の問いに100%の児童が「はい」と答えた。「４月に比べて、思い通りに歌えるようになった」「課題を見付けて練習したら、それに気を付けて歌えた」という声が聞かれた。実践を通して、自分の思いをもち、音楽表現にいかすためには、どうすればよいか試行錯誤しながら活動する中で、主体的に取り組むことができるようになったと考える。今後も、主体的・協働的な学びの中で音楽表現を追求することで「音楽を学ぶ楽しさ」気付くことができるような授業を考えていきたい。



【歌唱に関するアンケート（実践後）】

Ⅳ　第７４次教育研究愛知県集会のまとめ

１　実践報告

音楽教育分科会では学習活動における子どもたちの変容をわかりやすくとらえるために動画を取り入れた発表形式ですすめられた。実践報告では、主体的・協働的な学びを重視した多様な音楽体験を取り入れた活動、音楽的な見方・考え方を働かせた表現の工夫、思いや意図を表現するために必要な技能の習得などに焦点を当て、子どもたちが心から音楽の楽しさを味わい、いきいきと活動しながら学びを深めていく姿が表れた授業実践が数多く報告された。

２　討論の内容

(1) 子どもたちが協働的に音楽表現を追求できる効果的な手だて

今までの音楽活動の経験や音楽的価値観に違いがある子どもたちが、協働的な学習を通して学びを深めるためには、「同じ課題」「同じ視点」で取り組む環境づくりを行うことが重要であるとの意見があがった。実践報告でも、互いの演奏を聴いて考えを伝え合うことで、新たな価値観が生まれて表現の幅が広がったり、課題を解決するための方法を友だちとのかかわりからみつけ、よりよい表現方法を追求したりする例が報告されている。協働的に学習に取り組むためには、一人ひとりが自分の意見をもち、自立した状態で音楽をつくり上げる必要がある。次に、音楽作成アプリや録音機能などの活用は、音楽表現に苦手意識をもつ子どもの助けとなり、みんなが同じスタート地点から表現方法の工夫を考えることができる有効なてだてであるという意見があがった。一方で、音楽づくりや創作活動における評価方法の難しさも話題となった。ＩＣＴを活用した授業実践も数多く報告されたが、活用するだけで終わるのではなく、目標や課題設定をより明確にし、適切な評価を行う必要がある。

(2) 主体的な学習活動の中での教員指導・支援のあり方

子どもたちが「やってみたい」「次はこうしたい」と、次時へのつながりを感じられるよう、教員が環境整備を行うことが重要であるという意見があがった。実践報告でも、「このように演奏したい」という思いや意図をもち、主体的にとりくむ気持ちを高めるために、子どもが曲と出会う瞬間や学びの振り返り方を大切にした活動例が報告されている。また、自分の思いや意図をもとに、表現方法を工夫する学習活動も数多く報告されたが、その思いや意図を音で表現するための技能を身につけることの重要性もあげられた。思いや意図を音で表現する活動を通し、自らの課題を解決するために必要な力を確実に身につけ、自己調整を行いながら成長を実感できるような授業づくりを行うことが大切である。

３　来年度の課題

(1) 音楽づくり・創作活動の評価方法について

(2) 主体的・協働的な学びの中で自分の思いや意図を実現するための技能指導のあり方について